まんだら通信

第 248 号（通巻 282 号）

平成 29 年 03 月 西暦 2017 年 皇紀 2678 年　佛誕 2583 年

295-0103　千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派　天神山　紫雲寺　髙橋　龍渉
郵便振替　00120-2-43163　紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
URL http://www.awa.or.jp/home/ryusho/
E- mail ryusho@awa.or.jp

お大師さまに会うまで

私には保田龍秀という兄弟子がいました。

といっても、大東亜戦争末期の昭和十九年十一月十七日、フィリピンのレイテ島で小隊長として作戦中に戦死しましたから、会ったことはありません。

余談ですが、レイテ島といえば作家大岡昇平さんの大著『レイテ戦記』が有名ですが、この中で「レイテ島の攻防は、何ら戦略上は必要がなかったにもかかわらず、緒戦で敗れたマッカーサー最高司令官の単なる意地と、日本軍指導部の無能によって、日本軍八万人以上、米軍数千人の、本来なら失わずにすんだ筈の若い命を失う、という悲惨な結果となった。」という意味のことを、万感の思いを込めて書いていますね。

この戦闘ではまた、食料弾薬を断たれ、飢えに苛まれながら敗走する、という意味でも、悲惨な結果をもたらしました。

この『レイテ戦記』に保田少尉についての記述があります。

密林の小川でカニをとった部下が、「小隊長どの、これを食べて下さい」と差し出した時「私は坊主で殺生は似合わんから、貴様たちが食べるように。」と押し返したという話です。

安房中時代から成績優秀の、かけがえのない愛弟子を失ったことで、後に私の師僧となる、時の住職で高齢の龍岳和尚の嘆きは如何ばかりだったでしょう。

そのような時「そう言えば、満州で家族を無くした生き残りの子が、すぐ近くにいるよ。」と、世話人さんの誰かが言ったのでしょうか。

「お寺で弟子を探しているけど、行ってみるか。」と父親の実家から話がありました。お寺など、どんなところか皆目見当もつきませんでしたが、「上の学校へ行かせてくれるそうだ。」のひと言が決め手でした。

尤もその年の秋、体調を崩した師僧は翌昭和二七年春に亡くなり、少しでも早くお坊さんの資格を取らなければ檀家が困るということになって、「上の学校へ行く」という話は空手形になりましたが…。

こうして振り返ると、人の運命とかご縁などというものはまことに不思議なものだと、つくづく思います。

若し戦争がなく、兄弟子が健在なら、或いは私の両親や幼い妹が自決をしなければと考えると、これらの有ってはならない出来事が有ったお蔭で、類い稀な懐の広い宗教家、弘法大師空海、つまりお大師さまの弟子の末席に連なることになった訳ですから、ご縁というものは本当に不思議だと思います。

香川県善通寺市にお生まれになったお大師さまは、幼い頃から神童と呼ばれ、一族の期待を担って、一八歳の時、今で言えば国家公務員になるため都の大学に進みます。

夜を日に継いで、官僚になるための学問である儒教や道教を学びますが、自分に相応しい生き方は、仏教で人々を救うことであるとご決意を固めます。この時お書きになった、世界で始めての戯曲『三教指帰』の中で、ご自分の不退転のお心を披瀝しております。

大学を退学してから、四国や吉野などで山岳修行者の人たちとともに、野や山に伏して厳しい修行を重ねられます。

その修行の一つ『虚空蔵求聞持法』という、夜を日に継いで虚空蔵菩薩のご真言を唱え続ける修行が終わる明け方、室戸の岩屋で明けの明星が口に飛び込むという奇蹟を体験して、一度聞いたことは忘れないという能力を身に付けることができました。

京部市立芸術大学名誉教授で、文化勲章受章者の梅原猛先生は、お大師さまをレオナルド・ダ・ヴィンチと肩を並べる天才、と称賛したそうです。

土木・薬学・書道や絵画など芸術の業績のどれをとっても、まさにその通りですが、私にとってのお大師さまは、所謂偉い人にありがちな遥かに遠いお方ではなく、いつでも気軽に愚痴を聞いてくれる人、親身になって励ましてくれる、暖かく広いお心の持ち主です。

だから、あれから千二百年余り四国八十八ヶ所をめぐる『お四国』や高野山に、日本中の人たちが惹きつけられ続けるのではないでしょうか。

東京都杉並にお住まいの仏画家、田治見美代子さんが額に入れて奉納して下さった弘法大師像です。縦 62㌢、横 52㌢。
印刷機の関係で、色が原画と微妙に違いますしガラスの反射もありますが、暖かなお心が伝わってきます。

余滴

▼３月の異称は弥生。『やよい』は「いやおい」で、草木が益々生い茂る月という意味だそうですが、やさしいみやびな響きが暖かな春に相応しく、好きな言葉です。▼細川たかし『矢切の渡し』。村田英雄『王将』。島倉千代子『東京だよおっ母さん』など、日本人の心を歌ってヒットを飛ばした船村徹さんが、先月 26 日 84 歳で亡くなりました。長女が生まれた産院がある栃木県船生村出身ということもあり、親近感のある大作曲家でした。▼昭和 20 年３月 10 日は東京大空襲の日ですね。ボーイング B29 の大編隊が東京の下町を焼き尽くし、死者は 10 万人以上といわれます。広島・長崎を始め日本の殆どの都市に、新開発の焼夷弾を雨あられと降らし、無抵抗の一般市民を虐殺した、まぎれもない戦争犯罪です。日本人は相手の罪をいつまでも恨み続けることはしませんが、事実を忘れないことは悲惨な殺し合いをしないための教訓として、大事なことではないでしょうか。

翌日、ジュラルミンの機体を朝日に輝かせて、続々と太平洋上に帰る大編隊の、敵ながら美しい姿を、はっきりと憶えています。

▼今月の野草…ではなく本当は樹木ですが。ヤシャブシ【カバノキ科ハンノキ属ヤシャブシ】です。

野山がすべて枯れ草色の真冬に見える春先、ふと見上げるとこの花の房が垂れ下がっています。特に美しいとか印象的なことはないのですが、静かにめぐる季節の確かさに驚かされます。

新しい道路の法面や崩れた崖の更地になったところに逸早く生え、根に共生する根粒菌が土壌を肥やし、やせ地でも良く繁る特性があるため、緑化植物として貴重だそうです。漢字では夜叉五倍子で、タンニンを多く含むので、黒色の染料として重宝されるということです。

2017/03/09　龍渉

Mac mini 2.6GHz （MacOS X EL Capitan10.11.6&SnowLeopard10.6.8）・ WordProcessor,egword Universal 2.0.2・printer DocuPrint C3350・Camera Nikon D5000

にっぽん人情小噺　三遊亭鳳豊

末は博士か大将か

相変わらず、嫌な事件が続きますが、特に若い人が起こした事件を見てみますと、「無職」という人が多いですねえ。

不景気だから仕事がない。仕事がないから、金がない。金がないから生活が苦しい。

将来が不安。やけくそになる。事件を起こす。この繰り返し。または、やりたい仕事がない。

家にいる。親から働けと言われる。しかたがないからアルバイトをする。やりたい仕事じゃないから、長く続かない。また家にいる。親から叱られる。金はない。便所の火事でやけくそだ……。

今日は、そんな若い人に、ぜひ聞いていただきたい話をしたいと思います。

岩手県の住田町という田舎町に、寛ちゃんという高校生がいました。この寛ちゃん、学校ではテニスの選手としてかなり活躍していたのですが、家が貧しいので大学には行けず、就職することになりました。

とは言っても、そんな田舎で仕事などありません。そこで考えたのが食いっぱぐれのない仕事。なんだと思います？　鮨屋の見習いです。住み込みで働けば、最低限、食うことには困らないと考えたわけです。

しかし、地元には鮨屋などありません。知り合いを頼って、宮城県の仙台までやってきます。そして、仙台では一流と言われている鮨屋になんとかして入り込みます。もちろん、いちばんベーペーですから、鮨など握らせてくれません。先輩たちにはここまでやるかというほどいじめぬかれます。それでも運動部で鍛えた根性だけで、耐えに耐えました

しかし、二年経って、漸く巻物が出来るようになったとき、どういうわけか、突然、主人の一声で首になってしまいました。

いま思えば、鮨屋の経営上の問題だったかも知れません。

体のいいリストラです。

寛ちゃん、ここで考えました。このまま地元に戻ったところで仕事がない。悩みに悩みました。仕事がない。金がない。金がないから生活が苦しい。将来は真っ暗。やけくそになる……という境目でした。

そのとき、お父さんがその昔、寛ちゃんに言ったひと言を思い出したのです。

「寛、鮨屋はなんて言ったって、東京の銀座だ」

寛ちゃんは、持っていたお金で東京までの切符を買いました。残ったお金は、十円玉ひとつだけ。それを大事にポケットに入れ、上野駅に着いたのは、夜でした。もちろん、泊まるところもありません。寛ちゃんは、折からの木枯しを避けるがごとく、駅前の公衆電話ボックスの中に入り、朝の来るのを待っていました。

ふと見ると、古新聞があります。誰かが電話をかけた後、捨てていったのでしょう。

寛ちゃんはその新聞を広げ、鮨屋の見習を募集している案内を見つけました。ポケットを探ると、大事にしまってあった十円玉が出てきました。寛ちゃんはその十円玉で、新聞にあった銀座の鮨屋に電話をかけました。三分間の勝負でした。

「また、かけてくれ」と言われたらおしまいです。最後の十円だからです。

願いは通じました。「明日、午前中、仕込みの頃に来い」と言われたのです。その晩、電話ボックスで夜を明かした寛ちゃんは、人に道を聞きながら、初めての銀座をさまよいさまよい、ようやくその鮨屋を見つけました。

すると、「いま、親方はいないから、夜、出直してきてくれ」とのこと。寛ちゃんはもうフラフラでした。仙台を出てから、食事をしていないからです．公園の水を飲み、ベンチに慄を下ろしたたまま夜を待って、再び出かけて行きました。

「おう、朝きた兄ちゃんか、よく来たな。だいたい、どいつもこいつも一度断ったら、二度と来ないもんだ。いい根性してるじゃねえか。雇ってやるよ」

鮨屋の親方は、朝も店にいたのです。でも、わざといないふりをして、仕事を探しにきた若者が本当に勤める気があるかないか試してみたのです。

その晩から、寛ちゃんはフラフラになりながら働きました。仕事が終わり、与えられた部屋の棚の上に残っていた、たった一枚のせんべいを発見し、口に入れたときのおいしさは、いまだに忘れられないと寛ちゃんは言います。

寛ちゃんの修業は、ここからまた始まりました。

それからしばらくして、故郷の友達から手紙が届きました。その友達は、勉強がとてもできて、東北大学の医学部に進んでいました。寛ちゃんは彼をよく知っています。彼の家庭は寛ちゃんの家など比べ物にならないくらい貧しい家で、いつも汚い格好をしていたので、高校時代、みんなにいじめられていた子だということを。

寛ちゃんは何度も彼がいじめられているところを助けてあげたものでした。彼にとっては寛ちゃんだけが友達だったのです。その彼からの手紙です。中を開けると「どうしても医学の参考書が買えない。必ず返すから五千円、貸してくれ」という切々とした文面でした。

寛ちゃんは最初の給料の殆どを彼に送りました。へたくそな字でこう書き添えて。「お前は医者になれ。立派な医者になって、おれたちの町に戻ってこい。俺も頑張るからな・・」

いま、寛ちゃんは東京・西麻布の『鮨寛』のオーナー兼職人です。お客さんは歌舞伎役者から文化人までひっきりなしに訪れます。私は寛ちゃんに聞きました。

「それで、その友達はどうなった？」

「ああ、大学で教授になってくれと言われるくらいの名医なのに、俺との約束を守って、いま町医者をやっているよ。俺の両親を大事にしてくれてさ、うれしいよ。」

貧しさに負けなかった元少年の笑顔がそこにありました。

にっぽん人情小噺　第二十九話

月刊誌、ＭＯＫＵの５月号からの転載です。お書きになった三遊亭鳳豊さんは、お名前からわかる通り噺家さんです。

三遊亭円楽の一番弟子、鳳楽さんのお弟子。「落語界から直木賞を」がモットーだそうです。

言い訳めいて　気が引けますが

今月号は、平成二十年五月号の再録です。『肺気腫（はいきしゅ）』という病気や、年取って元気がなくなったということも、多分あると思いますが、他に忙しいことが沢山あって、人一倍不器用な私としては手が回らないのが本当のところです。

生きているうちに言っておきたいことは山ほどあるので、以前書いたものを使い回すようなことは、出来るだけなくしたいと思っています。

とは言うものの、読み手の立場から考えると、以前読んだことがあっても、読み返してみたら新しい発見があった、ということもありますので、全くの手抜きというわけでもないと、自分を慰めております。

Mac mini 2.6GHz （MacOS X EL Capitan10.11.6&SnowLeopard10.6.8）・ WordProcessor,egword Universal 2.0.2・printer DocuPrint C3350・Camera Nikon D5000